

— 次の文章を読んで、問いに答えよ。

△筆者は知性の在り方を、一人称的知性、一・五人称的知性、三人称的知性と定めて記述を進めている。▽
芥川龍之介の小説に「手巾（はんけち）」という小編があります。我が子を亡くしたばかりの婦人が、その子の指導教員だった教授を訪ね、子供のことを淡々と話す。その様子を訝しく思った教授が、しかしテーブルの下に目をやると、ハンカチを握りしめた手が震えていた、といったものです。

ハンカチを見なかったとします。亡くなったばかりの我が子のことを淡々と話す母親は、子供の死を理解できない冷淡な、心ない人間なのでしょうか。知覚できた事実だけで推論するならそうなるでしょう。しかし、我が子の死に際し、何も無いと思うことは普通できず、悲しみに耐え、あえて平静を装っている。^②通常、そのように考えるのではないのでしょうか。

「通常、そう考える」という発想は、「私たち」という共通の場を開き、思いやりの場を開くように思えます。しかし共通の場を指定することは、特定の解釈を断定し強制することになりますから、一人称的知性に他ならないのです。

知覚された情報だけから「この母親は冷淡だ」と考える「わたし」の描像や、「逆に辛さに耐えているのだ」と考える「私たち」の描像も、一人称的知性に過ぎない。そうではなく知覚に対する解釈≡性質を列挙すること、に自信が持てず、そこに「何だろう」が伴い続けること。これが、糊代①をもたらず一・五人称的知性の核心なのです。

一・五人称は、他者や他人の心に具体的イメージを強いることがありません。ただ、「何だろう」と思うだけです。この「何だろう」が、想定できない外部に対する **A**。それが、知覚できない外部の存在を受け容れる、ということです。一・五人称は、「何だろう」だけです。亡くなったばかりの我が子のことを淡々と話す母親、という「わたし」の知覚に自信が持てず、訝しく思う。それが、一・五人称的知性なのです。

もう一つ例をあげましょう。あなたは、どこか、避暑地のあまり利用されていない家屋を借りて、一週間ほど生活することになったと想像してください。水回りやガスレンジを備えた台所には、調理器具などほとんど何もなく、小さな鍋と食器、キッチンバサミが棚に置かれているだけです。あなたは、とりあえず、スープでも作ろうと、野菜とベーコンぐらいを買ってきました

が、使えるものは鍋とハサミだけという有様です。
ハサミで野菜やベーコンを切り、鍋に入れてハサミでかき混ぜるあなたは、一人称的知性を有した人でしょう。見える部分だけが情報のすべてなのです。とりあえず、シンクの下や小さな引き出しを開けてみるあなたは、見えていない、知覚していない外部を気にしていた。その結果、「何だろう」と思って開けてみたのです。もちろん、十分 **B** 的な一人称的知性もまた、自らの経験から見えない部分を探すでしょう。しかしその場合は、見ていなかっただけで、最初から想定されていたのです。

一人称的知性と一・五人称的知性は、初めての経験において大きな差を作り出します。いままで、「わたし」が経験も想像もしてこなかった台所の状況、例えば、冷凍庫の中に置かれていた包丁は、一・五人称的知性によってのみ発見されるでしょう。シンク下の引き出しに入っていた程度の包丁は、一人称的知性が有する、台所の記憶情報リストに残されているでしょう。だから見えていなくても、引き出しの包丁は知覚されていた。冷凍庫の包丁は、これに対して、リストには入っていないはずなんです。

わたしが経験しておらず、想定さえしていなかったような他者の悲しみは、想定される心のリスト（心のモデル）に収まっているはずもない。そのような他者の悲しみは、一・五人称的知性によってのみ、接近可能なのです。

一人称・三人称的知性と一・五人称的知性との違いを、悪夢とデジャブ（既視感）との違いとして、少し象徴的に描いておこうと思います。これによって、一人称、三人称と、一・五人称について、イメージしやすくなるかと思います。

大福や羊羹（ようかん）、みたらし団子など、甘味といったら和菓子しか知らない人を想像してみましょう。和菓子しか知らないとはいっても、テレビなど様々なメディアを通じて、アンコ以外にも、クリームを用いた甘味が存在すること、和菓子もひっくり返さずといった甘味をスイーツというらしいことは、彼も知っています。

その彼の目の前にチーズケーキが置かれています。周囲の人たちの様子から、彼はこれがスイーツであることはわかっているのですが、どのようなスイーツであるのかはまるでわからない。ここにスイーツとしては既に知っている（既知）、しかしスイーツの細目に関しては知らない（未知）という状況が成立しています。

この状況に対する判断を、一人称的知性、三人称的知性、そして一・五人称的知性に分けて考えてみます。前の二つの知性は、知覚できないものは存在しない、と考える知性でした。それは知覚したものから構成される、記憶の世界でも同じことです。記憶の中から、自分が今思い出している領域とそうでない領域を分離しない場合には、全部の記憶が押し寄せて来ます。分離した場合には、思い出さない部分は存在しないものとされ、思い出した部分だけが的確に想起されます。一人称・三人称的知性は、「分離」の知性なのです。

一・五人称的知性は、知覚できない外部についても **C** 知性でした。これもまた、記憶の世界に適用されます。記憶の中から、自分が今思い出している領域と、そうでない領域とは、常に区別されているもの、思い出していない部分についても、何となくぼんやり繋がっている。分離する・しないのいづれかではなく、常に区別されながらも、繋がっている。一・五人称的知性は、不完全な分離を意味する、「区別」の知性なのです。

彼が三人称的知性を有するとしましよう。彼はチーズケーキをどう解釈するでしょう。三人称的知性は、分離の知性であり、かつ的確な分離を実現する参照すべき仕組み（例えばスイーツという概念と、具体的なスイーツの細目を、論理的レベルの異なるものと考ええる思考様式）を保持していますから、スイーツであることの知覚は、目の前の未知なるものに対するタグとなつて残りますが、「スイーツであると知っている」という既知の感覚は、的確に分離されることとなります。こうしてチーズケーキは、「未知のスイーツ」と解釈されることとなります。

彼が一人称的知性を有するとしましよう。それは、的確な分離を実現できない分離の知性です。したがって、知覚された世界の外部は、存在しないものとみなされますが、目の前のチーズケーキの解釈に対して、記憶の全てが動員されることとなります。それはスイーツである。しかし何であるか同定できない。つまり自分のスイーツのリストに存在しない。すると、もしかして、スイーツではないのではないか。スイーツであることと、スイーツでないことは、こうして同時に組上^②にあげられ、スイーツであるか否かさえ決定できないこととなります。

極端な一人称的知性を考えてみましょう。それはスイーツかスイーツでないか、の決定に留まりません。それはスイーツでないとしたら、何なのだろう。猫かもしれない。しかし猫のリストにもない。では猫でないのかもしれない。いや猫でありスイーツであるという可能性はないのか。二つの性格の重ね合わせで、わかりにくいだけではないか。いやそうではない……こういうイメージの暴走が延々と続くこととなります。自分と関係のあるものを、過剰に摂取し溜め込んでしまい、意味のない可能なデータの組み合わせが、^③ノハウズに実現される。

これこそが、悪夢です。人工知能が実現する、記憶の組み合わせの暴走をアートとして見せる試みが、デイープ・ドリームですが、それは一人称的知性のなせる業なのです。

彼が一・五人称的知性を有する場合はどうでしょうか。スイーツとしての既知、細目としての未知は、区別されるものの、共存し、微妙なバランスを取ることになります。だから、「未知のスイーツ」という形で、既知の感覚を分離し^④ホウムリ去る、三人称的知性の知覚ともニュアンスが異なり、チーズケーキは、「スイーツではあるけど未知の何か」といった感じで、知覚されることとなります。それは、スイーツの既知性を伴った未知性なのです。「知っているけど、はつきりしないなあ」という感覚が強く伴うのです。

既知と未知の微妙なバランスが少しでも崩れると、既知は未知と併置され、既知であり未知であるという不可思議な状態が現れます。それがデジャブと呼ばれる感覚です。どこか旅行に行つて、初めての神社を目にし、初めてその神社の狛犬を見たはずなのに、過去に見た気がする。初めての経験に、何か経験したことがある、ここへ来たことがある感覚が伴う、それがデジャブです。

本当はどこか別な世界で経験していた、というならオカルトですが、デジャブはそんなことを考えなくても、説明はつきまず。初めての体験という知覚に、同時に何か懐かしい感じを伴わせさえすればいいわけですから。

ではどのように、未知であるという感覚に、既知である際に出現する感覚が伴うのでしょうか。それをうまく説明するメカニズムが、一・五人称的知性なのです。

目の前の未知のスイーツに、スイーツの既知性が覆いかぶさり、感覚を乗っ取ろうとする。もし完全に既知の感覚が略奪する

なら、「知っているはずのスイーツなのに、思い出せない」という感覚を持つでしょう。そうではなく、未知であることを自覚しながら既知の感覚を持つ。ここにデジャブが成立するわけです。つまりデジャブは、一・五人称的知性が有する不完全な分離

Ⅱ区別によって生み出されるのです。だから逆に、分離の知性である一人称・三人称の知性は、デジャブを生み出し得ない。デジャブには、何かしら懐かしさが伴います。それも、一・五人称的知性だからこそ理解できます。全ての区別は、不完全な分離なのですから、目の前の何か(チーズケーキ)は既知感を伴い、既知感は、そこから派生する懐かしさの感覚を伴い、さらに懐かしさは、そこから派生する、そこはかとなない幸福感をかすかに伴うのです。これらが完全に分離できないからこそ、デジャブは幸福感を伴う懐かしさと共にあるのです。

一人称は悪夢をもたらします。三人称は、原理的に悪夢を生み出すのですが、それを阻害するような仕組みが備わっています。一人称や三人称は、デジャブを生み出さない。一・五人称的知性は、知覚不能な外部に対しても存在を許容し、外部との不完全な分離を保つがゆえに、組み合わせの暴走としての悪夢を生み出さず、デジャブを生み出すのです。

(郡司ベギオ幸夫『天然知能』による。なお一部を改めた)

注 ディープ・ドリームⅡAI技術を視覚イメージに適用することによって得られる、人間の夢のようなイメージ、もしくはそれをつくる技術。

問1 傍線①、②の読みをひらがなで書け。

問2 傍線③、④のカタカナを漢字に改めよ。楷書で正確に書くこと。

問3 傍線⑦に「通常、そのように考えるのではないだろうか」とあるが、それに対して筆者はどう考えているか、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 子を亡くした母親が淡々とした話し方をしているのは、平静を装った悲しみがあるからだと考えている。
- 2 子を亡くした母親が淡々とした話し方をしているのは、子に対する愛情が不足しているからだと考えている。
- 3 子を亡くした母親の淡々とした話し方から、母親の悲嘆への思いやりをもたなくてはならないと考えている。
- 4 子を亡くした母親の淡々とした話し方から、「わたし」や「私たち」は悲しみを想像しなくてはならないと考えている。
- 5 子を亡くした母親の淡々とした話し方から、その奥に悲嘆があるなどと決めつけることはできないと考えている。
- 6 子を亡くした母親の淡々とした話し方から、その奥に悲しみがあることを他者が理解することはできないと考えている。

問4 Aに入れるのに、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 理解をする
- 2 読解をする
- 3 準備をする
- 4 防備をする
- 5 判断をする
- 6 独断をする

問5 Bに入れるのに、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 帰納
- 2 演繹
- 3 挑戦
- 4 常識
- 5 断定
- 6 創造

問6 Cに入れるのに、最も適当な語句を、本文中からそのまま抜き出して、八字で書け。

問7 傍線①に「一人称的知性を有する」とあるが、その説明として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 これまでに見たり記憶したもののみが存在するという考え方をもち、自分の認識だけに基づく判断をもつこと
- 2 物の存在を考えると、既知の場所だけでなく、未知の場所にあっても見つける能力をもつこと
- 3 ある解釈に決定せず、記憶にあるものも記憶にないものも存在を認めるといふ発想をもつこと
- 4 物の存在を考えると、既知の場所にはなくて、未知の場所にはみつける能力をもつこと
- 5 知覚したものや記憶したものに限定されない考え方をもち、他者の認識にひらかれた知性をもつこと

問8 傍線②に「一・五人称的知性を有する」とあるが、その説明として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 知覚の分離をよとせず、既知と未知とを同一のものとみる発想をもつこと
- 2 知覚に自信を持つことができず、既知と未知を断ち切らない考え方をもちこと
- 3 知覚の分離をよとせず、未知の対象に際限なくイメージをふくらませる発想をもつこと
- 4 知覚に自信を持つことができず、知覚しないものを存在しないものとする考え方をもちこと
- 5 知覚の分離をよとせず、既知の感覚で未知の存在を覆いつくす発想をもつこと

問9 本文の内容に合うものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 一人称的知性や三人称的知性とは異なり、一・五人称的知性は、他者に対して正確なイメージをもたらすことが可能であり、子を亡くした母の悲しみに寄り添うことができる。
- 2 芥川龍之介の「手巾」を読んで、「何だろう」と思うことは、単に母親が冷淡を装っているが実は悲しんでいると思うことだけではなく、世の中の母親の悲しみに思い及ぶこともある。

3 記憶の問題における、思い出している領域と思い出さない領域において、一人称的知性は両者を的確に分離し、三人称的知性は両者を分離しないが、一・五人称的知性は分離せず区別して連続したものとしてとらえる。

4 和菓子しか知らない人が、洋菓子和遭遇した場合に、甘味のみならず猫にまで分野を拡大して考えるのが一人称的知性であるが、甘味の分野に属するものとしつつも分離して未知のものとして確定するのが一・五人称的知性である。

5 一人称的知性は不完全な分離によって悪夢がもたらされるが、一・五人称的知性は不完全な分離である区別によって既視感をもたらされ、そのことによって人は懐かしさの感覚を得る。

問10 芥川龍之介の作品を、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 都会の憂鬱
- 2 地獄の花
- 3 青銅の基督
- 4 死の棘
- 5 藪の中
- 6 道化の華

(郡司ベギ才幸夫『天然知能』による。なお、一部を改めた)